International Christian University
教育研究 Educational Studies 42 / 2000
pp. 23-56
研究論文 Articles

ジェンダーと知識
Gender and Knowledge

李　麻芝　国際基督教大学
Ma-Ji Rhee　International Christian University

Keywords
教育、女性、韓国における専門職の誕生、日韓
EDUCATION, WOMEN, BIRTH OF PROFESSIONALISM IN KOREA, JAPAN-KOREA

Abstract

In Korea, the establishment of early modern schools for girls confronted limits and criticism due to heavy patrilineal and patriarchal principles. Until Korea promulgated its civil law in 1909, women in general did not have full names, and they were called only by either their first names or by their surnames without an honorific title. The social existence of women was so insignificant that traditional Korean society did not even allow identifying a woman by her full name. Often a woman's name would not be inscribed in her family's registry. In many cases, her name was replaced with her husband's name in the family registry when she got married.

The establishment of education for women in Korea depended on the interplay of three different forces: American missionaries,

Korean private individuals, and efforts of the Korean government. Thus, the development of schools for women can be seen from how these different groups interacted. This article examines the development of women's education between the 1880s when the first Christian mission schools were established, and 1910, when Korea officially became a Japanese colony. The focus is on the three groups working to establish education for women and the responses they met, both on the official level and in public opinion. In this article, questions concerning educational thoughts related to women's education in the 1890s and the conflicts and limits to the Confucian view of education for women will be explored by focusing on how Christian-initiated schools for girls met these limits and criticisms. The growth of Korean private schools established against the Japanese influence in Korea's educational enterprise, the Korean government initiatives for educating women, and the themes related to gender and knowledge under the Japanese colonial administration will also be discussed focusing on the development of higher schools, new women, and the birth of professionalism

1. 序

孔子曰く、「女性と生まれの低い人はとても扱いにくい。親しくすると、彼らは逃げ、距離をとると、彼らは憤慨する。」(論語 第十八巻)

韓国では、近代初期の女子教育の確立は根強い父系制と家長制の原理によって、限界と批判に直面した。韓国が 1909 年に民法を公布するまで、女性は一般に名前か、敬称をとった姓だけで呼ばれていた。女性の社会的存在は重要ではなかったので、伝統的な韓国社会では、女性を氏名で確認することを認めなかった。しばしば女性の名前は家族登記簿にも銘記され

なかった。多くの場合、女性が結婚すると、家族登記簿の女性の名前は夫の名前と置き換えられた。

19 世紀後半の女子教育の発展の視点から、各国における共通性は明確である。バージニア・ウルフの『三つのギーニ』では、女性のための教育の場が全く無く、女性が部外者に留まるほど処遇が良くなるという社会が描かれている。ウルフは、女子のための初等教育と中等教育が受け入れられた時と場においてこれを著した。大学教育については議論が分かれたままであった。19 世紀の英国における論争は初等教育の権利についてであり、特に低い社会階層の男女に教育が行われるべきかどうかについてであった。しかし、女子に対する読みの教育については論争の余地はなかった。対照的に、韓国の近代女子教育の発展において独特だと考えられるのは、儒教原理が歴史の状況と視野に影響を与えたことである。このような状況の中、世紀の変わり目において、韓国の近代教育制度が女子教育の可能性についての様々な論争、疑念、そして不安定に直面した。

韓国における女子教育の確立は三つの異なるグループに依存していた。アメリカの宣教師団、韓国の私的個人、及び韓国政府である。女子のための学校の発展は、これらの異なる集団がどのように相互に影響を与えたかによって見ることができる。この論文では、最初のキリスト教のミッションスクールが設立された 1880 年代から韓国が正式に日本の植民地になった 1910 年までの女子教育の発展について考察する。三つのグループが行った女子教育の確立と彼らが経験した公式レベルと世論の両方における反応についてを中心に検討する。また、クリスチャンによって創始された女子学校が、どのように限界と批判に直面したかに焦点を当てることによって、 1890 年代の女子教育の教育思想に関する疑問と、女子教育の儒教の視点に対する論争と限界を探求する。韓国の教育事業への日本の影響により設立された韓国の私立学校の発展、韓国政府の女子教育への指導、そして日本の植民地下でのジェンダーと知識に関するテーマについても、高等教育の発展、新しい女性、そして専門職の誕生に焦点を当て、議論していく。

2. 韓国女性の理想像：女性と知識に関する儒教の視点

19 世紀の終わりにかけて、韓国は西欧からの新しい文化概念と日本の植民地主義の挑戦の両方に対処しなければならなかった。女子教育の発展はこのような環境の変化を反映していたと言える。19 世紀における韓国のジェンダーと知識の関係は、父系制と家長制の原理に基づいたものだった。Ebrey (1991) が示したように、父系制は家系と親族関係の概念を中心としたものであり、家長制は財産と権力の構造に関連していた。父系制の原理によると、父系の家系のみが家名と財産の分離と継承を認められ、親族関係の義務は非常に父系的であった。この文脈において、女性の家族は考慮対象から除外されていた。女性が嫁ぐと、彼女の義務は夫の家族との生活から生じるいかなる困難にも耐えることであるとともに、夫の先祖を敬い、男子を産むことであった。彼女の本当の両親は、出生の両親ではなく、夫の両親となった。家長制構造の性質の点からすると、家族資産は男性の家族に属し、父親はより多くの法的な権力構造を有していた。

社会の文化的、或いは法的な規制も家長制原理に従い支配していた。女性は男性より完全ではないと思われ、女性は法的な権利を持たず、儒教伝統で「七つの罪」として考えられていたことを回避しなければならなかった。それは、両親の話を聞かない、病気になる、盗む、姦淫する、けちになる、口数が多い、及び男子を産めないということだった。この文脈において、女性の妻と主婦としての役割は家系の継続のために男子を産むことに対して二次的であった。妻が男子を産まなければ、夫は他の選択の権利を持っていた。例えば、内妻をとったり、代理母 (ssibaji) を探すといったことである。妊娠した女性は男子を望むのが当然とされた。多くの逸話では、女子の誕生に対して否認、沈黙、罪悪感、絶望、悲哀をもつ女性を語り伝えている。そのような逸話はしばしば女性文学の『内房（書簡）文学』（金、1990）で描かれている。

これらの伝統的な慣例に加えて、苦難は女性の日常生活の一部であった。身体的な不快は農民社会の庶民生活において最低のことではなかったが、労働時間は長く休みも無く、冬は寒く、家内配管は欠乏し、そして暖房は

不十分なものであった。それよりも、特に心理的な苦痛の方が激しかった。というのは、通常三世代の家族が一緒に住んでいたからである。もし女性が七つの罪のいずれかを犯すと、その女性は追放され、非難された。例え夫の家族に虐待されても、その女性が両親の家に戻るという選択はほとんど残されていなかった。というのは、女性の出生の家庭は一時的な住居に過ぎないと考えられ、夫の家族の財産としての「本当の」人生を始める前の幾年かを過ごす場所に過ぎなかったからである。女性が両親の元に戻ることは恥辱であったのだ。もし戻れば、誰もがその女性がひどいことをしたために、夫の家族が彼女を追い出したと推測した。最もよくある心理的苦痛の一つは、嫁と姑の関係から生じた。姑が嫁を虐待する話はよくあった。例えば、食べ物を与えられなかった嫁が、飢えをしのぐためにしゃもじについていた米を食べた時、姑が死にいたるまで嫁を殴り、嫁は「米の花」になったという逸話があった（李、1989、p. 56）。夫の虐待に加えて、姑の虐待は庶民階級の女性にとっては当然のことと捉えられていた。女性は実質的な「証書のない奴隷」と考えられていたのである。

男女間の差別は女の赤ん坊が生まれた瞬間から始まった。女子は衣服、食べ物、しつけのあらゆる側面において男の兄弟とは区別して扱われていた。この歴史的な文脈において、李王朝の正式な教育は儒教の家族価値を反映し、男性のためだけに制限されたものであった。書堂（村の私立学校）、書院（上流階層（兩斑）の学校）、そして郷教（政府運営の村の学校）といった伝統的な初等学校は 5 歳から 18 歳の男子のためのものであった。伝統的な男女の社会分離と、無知は女性の美徳であるという信念があいまって、女子をこれらの学校から遠ざけた。加えて、学校は、建築物に見られるように、父系の祖先崇拝のための氏族本部としての役割を果たした。また、これらの学校での教育は、科挙試験への最初のステップであり、男性のみに制限された儒教と詩の勉強に基づいていた。学校は卒業生の多くが公務に就いていることを自ら誇っていた。これらの村の学校は、学びの場所だけではなく、同時に氏族連合の場所でもあったのだ。また、行政の役職をめぐって争う「党派対立」の源泉になったと批判された。

これらの学校は、科挙の試験の準備をしている者のために企画されたカ

リキュラムを基に設立された。男子は修業年限に応じて特権を与えられたが、女子は制度化された教育を受ける実現可能な方法が全く無かった。正式な教育の目的は学問的探求と、科挙試験に通って中央行政の政府役職の資格を得ることの両方であった。李王朝下の韓国の教育は、科挙試験を中心としていたのだ。学校では、主に儒教書を読み、詩を書くことから成っていた試験で成功するように、生徒を準備させた。これらの学校は、政府役職の中に継続した系統を得るために、自分の学派からの卒業生を増やそうとした。

女子はこれらの学校から完全に除外され、1895 年に大韓帝国政府が教育の権利を公布するまで一人の女子も学校に入ることはできなかった。すべての階層の女性は家庭内の領域に制限され、子育てをし、そして厳しい夫の家族に対処しなければならなかった。低下層の女性は、加えて畑での仕事も負担していた。低い社会階級の王への従属、子供の親への従属、妻の夫への従属、若者の年配者への従属を中心とした儒教の権威主義的な家族倫理は、個々人は家族の文脈の中に置かれているという、家族を中心とした概念を有していた。李王朝下の韓国における女子教育の目的は、識字率を高めることではなく、父系の規則を中心とした、家族関係における倫理を学ぶことだけであった。漢字は学識貴族層（両斑）のためのものであり、漢字を学ぶことは女性の感情を乱し、実際に女性が恋文を読むように導いてしまうと考えられていた（孫、1977）。その代わり、ハングル（言文）を学ぶことは下位階層と女性のためであった。女子への教育は、儒教の家族イデオロギーの倫理的、或いは実践的な礼節と考えられていた。高位の政府の役人の娘のような社会上位層の女性のみが、女性のための啓発書である、儒教原理に基づいた女性の作法について書かれた書物を読んでいた。1431 年に書かれた『三綱行實圖』(Conduct of the Three Bonds)（写真描写付き）のような女性のための教育的な倫理書は、上流階級の女性達の間で読まれた。

これらの女性のための啓発書の他に、二冊の韓国人著者によって書かれた主要な書があり、これは主に学者貴族の妻たちに読まれた。それらの書は、李晃 (1501-1570) による『奎章要』（女子教育の概説）と宋時烈 (1607-

1689) による『戒女書』（尤庵の女性のための指導書）である。これらの書は、自己修養、家庭での義務、家事と育児に関するテーマを含んでいた。主題の内容は、夫への敬愛、夫の内縁の妻に礼儀正しくすること、夫の内縁の妻の子供を自分の子として扱うこと、夫の内縁の妻達と良い関係を維持することであった。しかし、このような書が読めるにもかかわらず、これらの上流階級の女性は本を読むことよりも、祖先崇拝の祭礼と行事を優先した。女性のための知識は、勉強や思索に時を過ごすというよりは、夫の家族に対する日常の義務を遂行することと考えられていたからだ。

教養の抑圧を推進する考えとは対照的に、18 世紀には伝統的な儒教概念に反する先進的な考えが現れ始めた。実践学習の支持者が書物学習の支持者に反論し、灌漑設備の改良、及び畑仕事のための効率的な道具の開発などといった実践的な事柄の問題に焦点を当てた。この学派は、しばしば伝統的な政府に反対し、後の 1880 年代後半に国家のための「開化」へと動くように政府に働きかけた。進歩的学者の一人である李瀷 (1682-1764) は、以下のように言及した。

> 女性は多くの仕事をしなければならないため、学問をする時間がなく、従って、女性は文字の勉強を試みてはならない。妻は労働、倹約、及び男女の分離という三つの方針のみについて知っていればよく、読書と講義の聴講は男性のためであり、学ぼうとする妻は堕落する（李、1974、p. 202）。

伝統的な儒教概念に従わなかった先進的な学者の李瀷でさえも、女子に対する公教育の必要性に関しては、潜在的な可能性さえ認めてはいなかった。著作の中で李瀷はさらに、女性の四つの主要な義務は、食事を用意し、洋服を作り、祖先を崇拝し、そして家に客を迎えることであると説いた。女子の教育では、家事に関する内容が中心となっていたのだ。読書や文学は男性のものであった。漢文の古典を読むことは、李瀷の定義によると、真の学問の水準を達成することであり、そのためには時間と努力を必要とする。李瀷は、女性は既に家庭の仕事で忙しいため、勉強しないことが美

徳と考えていた。一方、男性としての理想像は、教育を受け、漢詩の作り方と宴会の楽しみ方を知っている学者であった。

影響を与えた学者の中で、朴泳孝は進歩党のメンバーであり、その娘は伝統的な儒教の文化イデオロギーに反対した初の近代的なキリスト教系の学校に通った、数少ない生徒の一人であった（朴、1984）。朴は 1886 年の日本への視察旅行から帰国した後、近代国家へと発展させる政府の議事項目の一つとして、政府に国家の「開化」の必要性を陳情し、すべての国民の教育を提案した。彼は、教育は国家を治める主要な手段と考えていた。しかし、彼の「開化と教育」という言葉の中で、女性については議論されることさえなかった。当時、彼の開化と教育という言葉においては、女性は価値のないものとされたのだ。

近代制度の確立への動きは、この 1880 年代の時期によく描かれている。新しい知識を学ぶ近代形式の学校に対する切迫した必要性の認識は、最初に商業団体から起こった。1883 年に、朝鮮半島の北部の港町に設立された元山貿易組合が行政官の支持を受け、地域住民のための最初の近代学校の開設を推進した（韓、1983）。その港町の日本人商人の増加に刺激され、その学校では「人文」と「軍事」という二つの部門が設けられた。新兵の募集は庶民を対象にして行われ、学費は安価に設定された。教科書は軍事書から地理学、国際法、日本語、中国語、ロシア語にまで及んだ。

国家レベルでは、政府系学校が外務省によって設立された（統理機務衙門）。外務省は国際関係と韓国と欧米列強間の貿易に対処するために設立された。外務省下では、特別な機関である育英公院が、西欧からの新しい知識を獲得し、政府役職が約束されている男子の教育のために設立された。教育目標は主に男性を翻訳者と通訳者として訓練することであった。このアカデミーの背景では、中国人の委任を受けたドイツ人の Von Mollendorf が外務次官として任命され、実践的な助言を提供していた。この最初の近代式の学校は、後に外務関連の政府官職への官吏を養成するようになった。しかし、この「新しい」形式は、教育制度が依然として政府役職に就くための試験に基づいていたため、人気を得られなかった。

3. 改革運動：ミッションスクールと女子教育の制度化

3.1 最初の女子のための学校設立：梨花学校

三年後の 1886 年に、変化する国際外交に対処するために政府が指揮をとり、国際外交では通訳者の需要と条約改訂の熟練した参加者が大いに必要とされていたにも関わらず、最初の近代学校の育院公院が閉鎖された。保守的な指導者のこのような新しい考えに対する支持不足と政治的、党派的な相違があいまって、軍事的暴動の風潮を促した。開化派は国家が近代化することを望み、1884 年に改革を試みた。しかし、改革は支配的な保守指導者に意見を聞かれることなく三日間の政府に終わった。

Mary F. Scranton 夫人 (1832-1909) は、韓国で働くことに興味を示したクリスチャンミッショナリーの一人であった。しかし、李朝の政治情勢が不安定だったため、しばらくの間日本に滞在した後、夫人は息子と義理の娘を連れて、最初の女子のための学校を自らの責任と費用によって設立するために、1886 年に韓国に渡った。この出来事は、女子のための近代学校の発展において鋭敏な点を残した。Scranton 婦人は、女性の役割が祖先崇拝の補助的な代行者の文脈のみで考えられ、教育の権利や可能性は全くないと考えられていた李朝社会において、革命的な存在であった。Scranton 婦人の教育目標は「開化」であり、それは夫人の教育的及び医学的使命の一部であった。彼女の使命は、迷信を信じる伝統的な習慣から女性達を退け、人間として生活するのに適した権利を獲得し、複数の内縁の妻を持つ家長制の習慣・女性奴隷の貿易を無くし、男女間に社会的に距離を置く厳しい規則を廃止することであった。この目的を達成するために、最初に彼女は生徒を探さなければならなかった。梨花学校の最初の生徒は女性の物乞いであり、十分な寮設備、住居、及び聖書の勉強、韓国語と英語の勉強が提供された（梨花、1988)。

この最初の段階において、ミッショナリーによって設立された近代学校は孤児院に近い機関であった。寮設備が与えられ、修了後に与えられる嫁入り持参金のための資金まであった。設立の初期には生徒と親との契約は下記の通りであった。

米国人宣教師の Scranton は韓国人の朴夫人に誓約を書く。

私はあなたの娘であるポッソンを育て、教育し、あなたの許可なしには彼女を学校から 10 マイル以上離れた所や西欧には連れて行かない。（梨花女子大学、1967、p. 44）

カリキュラムの内容は英語、韓国語、そして韓国語で行われた宗教の授業であった。最初の数年間は、8 つのクラスがあり、生徒は裁縫と洋服の作り方を学んだ。教授方法は質問と応答に基づいていた。以下は科学のクラスからの一例である。

先生：昼はどのように夜になりますか？
学生：地球が太陽に向いたら昼になり、地球が太陽と反対に向いたら夜になります。
先生：子供を育てる方法は？
学生：庭に木を植えるようなものです。（李、1992、p. 114）

また、寮生活では洗濯を行い、その方法は伝統的な衣服の洗い方と異なった。学校では、生徒は 10 年以上在籍することはできなかった。しばしば、季節ごとの花を観察する遠足は人々の注目を集めた。というのは、女性の一群が、近代的な衣服で公共の中を歩くということは珍しかったからである。これはこの頃の韓国人から見るとかなり過激であり、これに増して、近代的な建物の構造の異様さ（水洗トイレ、セントラルヒーティングシステムといったもの）、また多くの教師がアメリカ人宣教師であったことから、「西欧の野蛮人は韓国人の女子を連れ去り、食べてしまう」という噂がよく流れた。近代の女子校は韓国政府が女子教育の必要性を認識する前に設立されたと言える。なぜなら、Scranton 夫人が学校を開設してから 13 年が過ぎて初めて、韓国政府は公式に 1895 年に教育を近代化したからだ。梨花学堂は韓国人の住宅の改築したものであったが、この建築デザインは伝統的なソウルの町でとても目立った（尹、1988）。

Scranton 夫人が学校を設立した時期には古い慣習法が浸透していた。1880 年代後半から 1890 年代にかけて、韓国の経済情勢は、韓国の農業部門市場に徐々にマイナスの影響を与えた日本・アメリカ・中国・ロシアとの間の不平等条約によって、厳しい情勢にあった。日々の生き残りの問題が大多数の人々にとって緊急の懸念となった。

女子のための教育は、しばしば韓国人にとって妻になるための準備をする期間であると考えられていた。知識の獲得が結婚のためであった伝統においては、女子学生と両親との間に結ばれた契約では、学校卒業時には結婚することを約束していた。しかし、1890 年代の後半には、キリスト教教会の普及が開化派とその家族に影響を与え、後にその中の何人かは女子のための高等教育学校を設立した。

韓国人へのキリスト教の影響は、重大であった。梨花学堂の卒業生には韓国での最初の女性の医者になったイ・キョンソクとウエスリヤン大学で学士号を取得した初の韓国人女性のハン・ラサンがいた（梨花、1988）。その他のキリスト教ミッションスクールの韓国人卒業生は、後に韓国が日本から独立した 1945 年以降の私立大学の創立者となった。ソウル女子大学の創始者である高晃郷博士はその自伝において、平等と開放性の概念がいかに彼女に影響を与え、キリスト教の概念がいかに彼女にアメリカ留学を決意させたか、そして宣教師達がいかに彼女の留学を支援したかについて述べた。高博士は、1937 年にミズーリ大学で社会学の博士号を取得した初の女性であった。また、高博士は農村の女性のための講義も積極的に行った（林、1988）。

3. 2 女性のための近代教育の誕生：女性の教育とそれに対する意識に関する理論

どの新しい概念も既存の制度に浸透するのに時間がかかるように、1895 年の改革は、伝統的と考えられていた重要な項目が近代的なものに変えられたという点で重要であった。この動きにおいて、韓国政府は伝統的な習慣に体系的な変更を公布した。まず、改革によって社会階層制度の廃止と奴隷の開放が行われた。他の変更された項目は、女性問題に関連していた。

早婚の禁止、未亡人への再婚許可の授与、非摘出子に対する差別の廃止、公務員と軍事階級の分離、そして犯罪処罰を親族へ拡大適用する伝統的な習慣の廃止である。

1895 年の改革は、長く行われてきた慣習のため、あまり民衆に受け入れられなかった。しかしこの改革は、特に女性に対する新しい認識のしかたを開拓した点で重要である。法律によって、妾は一人ももってはいけないことになり、未亡人の再婚が許可され、内縁の妻の子供に対する差別が禁止され、同じ姓を持つ人同士の結婚を禁止する慣習が廃止され、そして摘出子の男児に優先権を与える相続制度と家長制祖先崇拝の儀式の両方が廃止された。

この改革に伴い、高宗王は 1895 年の皇帝勅令を布告した。これは初の近代形式の憲法改正であり、韓国が近代国家になることを宣言し、すべての政府文書において韓国語の使用を命令した。この極度のイデオロギーの転換は、中華文化イデオロギーを放棄し、韓国の国家独立を支援した。それまでには、李王朝におけるすべての文書による通信に漢字が使用され、中国の古典は文化規範の根幹と考えられていた。1895 年の勅令には、さらに教育の重要性が詳述された。

> 世界の国家情勢を見ると、富と権力によって独立を維持し、優勢であるすべての国家において、国民は知識において開化されている。開化された知識は教育の卓越性を通して獲得され、したがって教育は我が国の維持において真に根本的な重要性を持つものである（李、1984、p. 331）。

新しい知識は近代性の特定の側面と対照をなしている。さらに、開化の概念は知識の獲得を前提とし、結果的に国家独立に導いた。勅令による近代教育の三つの目的は、個々人の美徳の修養、身体的な力の発達、そして知的な発達であった。これらの教育目的は学術のみを強調する伝統的な慣習とは異なっていた。伝統的な慣習においては漢文を読むこととその解釈を優先していたのだ。身体面の教育の導入は、個人学習の発達という側面と共に、階級とイデオロギー体系が階層制に基づいていた時代においては

新しい観念であった。

1895 年の勅令はまた、伝統的な教育の主要な目的であった科挙試験の廃止によって、実質的にすべての個人に平等な権利を促進したという点でも重要である。さらに重要なのは、開化の解釈が、Johann Fichte による個人とその国家の間の強い絆を確立する必要性を認識する教育によって、真の倫理性と人格を実現する国家主義的な計画に類似しているということである。

政府レベルでは、勅令の近代的な形式を採用し、1895 年に韓国政府は様々な教育改革を公布し、韓国の新しい教育概念の指針を立てた。このように、初の近代的な漢成師範学校、外国語学校、成均舘（高等教育機関）、小学校、中学校、1899 年には医学学校、1904 年には農業と商業の学校、続いて 1905 年には女子のための高等学校、1906 年には集中教授プログラムを含む 3 年コースの師範教育、そして 1909 年には商業学校に関する法令が公布された。

1895 年の改革と「先進党」による実践は「開化」の政治的解釈を変え、中華文化イデオロギーへ強く傾倒していた保守派の批判を集中させた。この新しい解釈は、女性の教育の必要性に関連し、支持された。

文明の古い意味に反論して、アメリカで教育を受けた韓国人徐載弼によって創刊された先進的な新聞は、韓国語と英語の両方で「独立新聞」を発行し、文明化と開化の意義深い定義の模索に貢献した。開化の定義の答えを模索する時に、独立新聞はその初版に開化の概念を表示した。

> 「開化」の意味は、無知な人を啓き、合理的に考えさせ、そして実践心を持ってそれを実行に移すことに似ている。実践心を持つと、役立たないことや間違ったことをするのではなく、真と考えられる真実のみを行動に移し、部分的に、誠実に考えるようになるのである。（独立新聞、1896 年 6月 30 日）

女性のための学校の設立の必要性は、「開化された国家」の目標に到達するための重要な手段として、強調さえされた。

開化された国家では、学問は男性と女性を区別せず、したがってどの種の家族状況にあっても妻と論議し、そして夫と妻の両方が家族の大きい問題と小さい問題を区別し、女性が妻になれば、妻は夫との論議に参加し、教育によって子供達を正しい方向へと導くのである。家族が起こると、国家が起こる。西欧の女性は真の内助を行うが、東洋の女性は夫の召し使いになるだけであり、嘆かわしいばかりである。女性のための学校設立を試みている何人かの個人に感謝し、これらの機会に彼らを祝う。我々は学校が知性のある教師をみつけ、女子学校が無駄に終わらないことを望む……我が国家が開化され、他の国のように発展するためには、政府は女性のための政府運営の学校を設立しなければならない……。(独立新聞、1898 年 9月 13 日)

これらの新聞記事は、女性のための学校に対する民衆レベルの意識を明確に記述した。公共演説は、民衆の意見の普及のための新しい社交場となった。演説による伝達は影響を与え、教育するための強力な手段として認識されていた。本と教科書は日本が検閲していたため、公共演説が、近代教育の必要性と国家主権に関連してその政治的重要性について公共を教育するための主要な手段となった。

3.3 女性の能力に関する問題

政府の改革は教育の近代制度への発展に向けての最初のステップであったが、女性に関連することとなると、これが行き過ぎていないかどうか、疑問が生じた。これは韓国で最初の教育大臣である申基善が、「女性を教育することは野蛮な習慣である」と述べた時に明確になった。

野蛮人になり始めることは、自分の髪の毛を切り、西洋の洋服を着ることであると思う。文語の中国語の代わりに韓国語を使用することや西洋の暦を使うことは正しくない。

国務のために働く内閣の大臣が支配する規則は、王から権利を取り、国民に権利を与えている。これらはすべて売国奴の行動である。

私は教育大臣になったが、大臣としての義務を果たせない。というのは、国民にハングルの文語を使わせるのは、国民を動物にし、祖先を侮辱するようなものであるからである。私の役職を変えて下さい。というのは、教育事業の全体が（女性への教育を含む）我々の祖先の祭壇を破壊しているからである。(独立新聞、1896 年 6 月 12 日)

近代教育に対する政府の反応は限られていた。近代教育を実施することは公布されたが、実際に女子のための学校の設立を実現させる政府の具体的な動きは全くなかった。さらに、教育大臣が作成した声明と同様に、女性の教育に対しては、かたくなな反応があった。文明の新しい定義と開化の意味は李政府の権力者達の興味を引き付けなかったのだ。ハングルの文語の使用も、学識貴族階級（兩斑）には受け入れられなかった。というのは、漢文こそが特権と威信であり、真に文明化された人の手段であったからである。正式な教育制度に女性を参加させることは、政策実行者にとっては衝撃的であったのである。

4. 私立学校：女性の教育への熱意

4.1 組織

女子のための近代教育の緊急性に対する韓国政府の軽視に直面し、多くの上流階級の女性の率いる私立機関は女子のための学校の設立を始めた。これらの機関の学校設立の理念はジェンダーに関する意識を高めるためと考えられていた。この最初の組織化された集まりは政治的ではなかったが、その参加者に組織の経験をさせた。1898 年に初の妻達の組織である「敬愛組織」が形成された。この組織はすぐに韓国政府に対する請願を始め、政府に女子教育の勅令を発布するように要求した。その主旨は、政府による

女性のための学校の設立であった。

大ハン（韓国）が東洋の中で真に文明化された国になり、他の国に平等に扱われるためには、女子学生の教育が必要である。（独立新聞、1898年10月13日）

300人の参加者を持つ敬愛組織の創立はそれが女性によって結成された組織であるという点で重要である。この組織は加入費によって女子学校の設立の資金を援助し、『女子学校の設備に関する文書』において「教育への敬意を伴う第一回女性権利宣言」を言明した。韓国の歴史の中で初めて女性が教育の「権利」を発言した。これは、初の女性の権利の宣言として画期的な事実となった。このように、女子のための学校設立の目的は、女性の権利を得ることであったと言える。

我々の国よりも前に文明化され、開化された国においては、男性と女性は人間であり、したがって、幼い時から学校に行き、多様な能力を身につける。そして自らの見識を広め、大人になることによって、男性は妻に干渉する。対照的に妻は敬意をもって扱われる。妻の能力、権利、そして女性への信頼が人間（男性）と平等と考えられるのを見ることは美しいことではないだろうか。ああ、妻が男性の力によって抑圧され、男性の力によって女性が話すことさえできなくなるように言い訳を作った過去の日々を思うと悲しい。昔のやり方を捨て、新しい生き方をしようではないか。政府の創立する女子のための学校が他の国と同じようであり、女性が能力を身につけ、規則を学び、人に寛容になることを願う。（帝国新聞、1898年9月13日）

敬愛組織の教育目標は、教育が「精神世界の延長」（精神世界は女性の世界を象徴している）と定義されていたそれ以前とそう変わってはいなかった。この学校で使われた教科書は『女性行実録』（女性のふるまいの収集）であり、義理の父親、母親、そして姉妹に対して適切な敬意を表わす

こと、義理の兄弟と仲の良い関係を保つこと、貧困を難なく切り抜け、正妻の子供を愛し、貞節を守る、といったようなテーマが含まれていた（孫、1977）。不運にも、この学校は女子教育への民衆の理解不足によってすぐに閉鎖された。努力して女子のための学校を創立し、かつ資金の支援を維持するには限界があった。物理的な建築構造、適切な教師、教育課程の近代的な形式、などの学校機関の欠乏も、限界の要因だった。しかし、敬愛組織は全国的な組織の成長を促した。敬愛組織は最初の組織であったが、より政治的な議題を含んだ連合が数において増えた。韓国の首都であり、その政治的・文化的中心であるソウルでは、集権化された政府機関が地方都市や村を専制した。女子の私立機関はより意識的になり、女性の教育の具体的な計画を発展させることができるようになった。女子のための教育組合（女性教育会）は、1906 年に三つの学部を持つ良家の娘のための芸術院（良閨義塾）を開設した。教育部の目標は女性を「良妻賢母」になるように教育し、工場労働教育部は編み物・養蚕・裁縫・衛生学の教育を担当した。この学校の開設は、女性の権利を獲得するためであったと言えるであろう（朴、1984）。現に、後に高級官僚の妻達によって構成される韓国人妻の組合（大韓婦人会）が、養蚕関連の技術を教える講義会堂を開設した。

4.2 王族の運動

私立の組合以外にも、王族の家族と親日派の高級政府官僚の妻達によって構成される女性組織が、女性のための近代学校の設立を支援した。この時期に、親日派が李政府官僚で権勢をふるった。結果的に、特に教育分野において日本の影響が増大した。教育諮問委員は日本人であり、教科書局という部門がすべてのレベルにおける教科書の民族主義的な内容を検閲した。結果として、政府が創始した公立の学校は過剰に親日的になっていることを批判された。

女性のための教育の可能性に関する政府の悲観的な見方にもかかわらず、厳妃 (1858-1935) は、大胆にも女性のための近代型の学校設立に着手した。彼女は高級政府官僚と親日派の官僚の大多数から成るグループと共

に、淑明女子学校を設立するための寄付を行った。この学校は皇族家族のための日本の学校（学習院）を手本とし、王族家族と高級政府官僚を対象とした。教師は日本から呼び、学生のために寮設備を整えた。もう一つの女子学校は、同年に厳妃によって設立された進明女子学校である。これらの学校は共通の女子教育の目標を持っていた。それは、文明化の促進の手段として、国際的な趨勢に遅れないことであり、そのためには、女性を教育する必要があった。彼らの学校設立は、学校建築の点においてかなり目立っていた。これは女子のための私立小学校に対する君主制の後援とも見られるが、他のキリスト教教会の支援を受けた私立学校と比較して、この学校は教師を職員とし、カリキュラム、クラスの数、そしてコースの長さに配慮していた。この文脈において、男女の分離の方針を強く意識し、男性より女性の教師の方が所有者となり、男性の教師は女子学生と教室での接触が禁止されていた。

4.3 韓国人キリスト教徒による私立学校

王族による近代学校制度の設立のための努力に加えて、韓国人の個人、特にキリスト教徒もまた、女子のための近代学校の設立を熱望していた。彼らの動機は、「教育」と「開化」であり、さらに「国家独立」を果たすために国を「文明化する」ように導くことであった。韓国の学齢期の女子が直面した文化的制限にもかかわらず、私立学校は政府が設立した女子学校の数を超えた（韓、1983)。1886年に、アメリカ長老派のMary F. Scranton は、梨花学堂を創立した。同年に、貞信女学校がアメリカ長老派の宣教師によって設立された。アメリカ長老派による女子学校の設立を見て、女性の私立組織は継続して政府に学校設立を請願した（白、1974)。韓国人妻と日本人妻の組合は、上流階級女性のための政府学校の設立の請願書を提出した。しかし、女子のための学校制度の導入には大きな障害があった。それは早婚がかなり浸透していたことである。

見合い婚によって、幼い男子が十代の女子と結婚し、女子が夫の面倒を見ることになっていた。さらに、出生率もかなり高かった。

学校は教員・入学者数・カリキュラム・クラスの数・コースの長さの点

で多様であったが、概して規模は小さく、クラスも少なかった。例えば、同徳女子義塾が夜間学校として、一人の教師と一つの教室で始められた。一つの教室は生徒であふれ、時々女子学生に付き添うメイドでいっぱいになった。学生自治会にはメイドと孤児も含まれ、カリキュラムは漢字とハングルを部分的に教えることに限られていた。学校はカトリック教会からの資金援助を受けた。しかし、女子の教育目的は男子校と比較された。女子を高等学校に送る習慣はまだしっかりと確立されてはいなかったのだ。

4.4 政府設立の女子学校と日本の影響の増加

1905 年の日清戦争後に、韓国の領土と経済の利権をめぐる国際的な圧力が強まり、一年間に及ぶ海上戦の後に終戦となった日露戦争へと発展した。日露間で結ばれた条約の結果、ロシアは韓国に関する要求を撤回した。日本はソウルに駐在司令官を設置し、すべての国家機能は保護国法のもとで操作された。諮問委員会が組織され、外務部は記録部を除いて廃止された。教育部は日本の学術諮問委員会の支配下に置かれた。日本は既に韓国のあらゆる港町に学校を設立していたが、韓国では政府によって設立を計画された女子のための学校が、最終的に 1908 年に日本の教育諮問委員会のもとで実際に設立されるに至った。

プサンの日本の小学校は、港町の日本人居住者のための中等学校と同様に、既に 100 を数えた。日本の駐在司令官によって建てられた学校の数も増加していた（尹、1988）。

このように日本の影響が浸透する中で、国家の学習の動きが強まった。日本の保護国方針に対する国家的な抵抗運動によって、抵抗のデモも始まった。また、韓国史・地理・韓国語・ハングル文字の学習が、主に中国を専門としていた学者の中心的な焦点となった。

この国家教育熱の中で、1908 年に漢成女子学校が初の政府設立の女子の教育機関となった。女子高等学校法令は「高等教育、技術と芸術の教育は女性に必要である」と定めた（朝鮮総督府、1943）。この法令は女子教育の法的な規定を定めただけでなく、構造化された学校生活とカリキュラムを導入した。女子学生のための制服は新しい加工品で、生徒に象徴的な意

味を与えた。初等レベルから中等レベルまでの女子のための学校が発展していったことは重要なことだったが、韓国が日本の保護下にあり、日本の諮問委員が韓国の教育方針に激しく干渉したことも事実である。例えば、教科書の国家主義的な内容の検閲である。皮肉的なことに、女子のための私立学校が韓国の民間人とキリスト教宣教師によって設立されたにも関わらず、国民は日本政府が創設した公立学校を選ぶ傾向にあった。漢成女子学校の入学基準の場合、入学試験の得点だけでなく、家族の経済的地位、父親の職業、家族それぞれの背景などが全国的な新入生募集の基準となった。1909 年には 158 人の学生が入学し、校長は生徒が継続して通うことに関心を持っているかどうか確かめるために、家庭訪問をした。この学校は韓国の首都にあり、情報の不足と女子の公教育に対する根強い否定的な考えのため、地方からの学生はほとんどいなかった。学校の数は急激に増えたが、いずれも初等学校のレベルを超えず、教育諮問委員会は韓国総監府の集権化された官僚的指導のもとにあった。組織化された学科と教師の質の点では、政府が設立した学校は私立学校よりも優っていた。

4.5「教育によって国家を守る」

日本の干渉は一方で、韓国政府設立の学校に対する民衆の不信を高めた。そして、民衆の意識は政府の干渉に反して、私立学校を設立する必要性へと向けられたことは注目に値する。しかし、韓国の私立機関と民間人によって設立された学校の増加は総監が定めた基準を満たすことができなかった。総監はすべてのレベルの学校において日本人の教師の雇用を強制する厳しい規則を設けていたのだ。日本人教師の給料は韓国人教師よりも三倍高くなければならなかった。

日本政府の影響力にも関わらず、韓国人によって設立された私立学校の数は増えた。しかし、これらの私立機関には厳しい制限があった。これらの学校はほとんど政治的な組織によって開設された学校を含む初等教育機関であったのだ。女子の学校に関しては、夜間学校が大多数の焦点であり、女子のための近代学校の急激な増加は、全国規模ではなく、いくつかの地方都市に限られていた。

4.6 初等学校を超えるための私人の運動

学校へ通う必要性に対する反応は、民衆の意識を高めていった。初の近代形式の女子学校である梨花学堂の生徒数は増加した。1886 年には 1 人だった生徒数が、1900 年には 18 人に増えた。そして、1908 年には、梨花学堂の最初の中学校の卒業生が誕生した。ミッションの女子校はもはや娘を送るのに「危険な場所」としては考えられていなかった。梨花学堂のように、女子のための学校の多くは寮設備があり、キリスト教の私立学校には多くのフルタイムの学生が在学していた。開化派出身の支持者がいる京幾地方の首都では、特に伝統的に貴族主義的な儒教の思想が支配的であった北西地方において、キリスト教の普及が革新的な事業となった。韓国の北西地方には、海外の宣教師の支援を一切受けずに、韓国人だけで運営される多くの自治教会があった。

当時、教会と学校の設立は一般に愛国主義的な動きを意味し、日本の総監によって支配されていた状況の中で、潜在的な植民地支配からの解放を意味すると考えられていた。

1905 年の時点で、女子のための学校は 172 校あり、自治学校は北西地方に集中していた（ソウル：56、京幾：15、 忠清：5、 全羅：8、江原：1、慶尚：20、黄海：20、平安：30、咸鏡：30）。地方では、多くの小規模の女性組織があり、これらの組織はより愛国主義的であった。これらの女性組織は後に女子のための近代教育の制度化を創始する役割を担った。それにもかかわらず、この試みには多くの制限があった。これらの女性組織には、教育よりもより政治的な活動に向けての使命があった。1907 年に、これらの組織は積極的に国債を買い戻す運動に参加した（国債報償運動）。このような政治組織は、女性が組織の自主的な経験をし、それに伴い階級の差を縮めるという点で重要であった（丁、1986）。しかし、これらの組織目標の問題は韓国人女性の基本的な生活と教育の必要性を無視したことにあった。

私立学校の増加に伴い、私立の組織が義務教育を普及させる動きを始めていたことは重要な側面である。これらの私立の組織は特に女子の教育の必要性を具体的に支持していたわけではないが、義務教育の構成要素、フ

リースクール、そして平等な機会は階級と性差による区別を基本とする伝統的観念をなくした。義務教育と公教育に関する論議は 1905 年の大韓自強会によって始められた。しかし、日本人の居住地としての韓国の地位によって、議題は私立の組織へと移った。これらの論議は潜在的な女性の教育機関への道を提供した。

私立の組織が義務教育の問題を持ち出した時に、彼らの視点は予算の面で現実的であった。いかにションヒ会によって学校が支援されていたかの一例として真明学校を見ると、藁葺き屋根の家から来る生徒の学費は週 1 ウォン、タイルの屋根の家から来る生徒は 2 ウォン、10 から 20 の部屋がある家に住む生徒は 1.5 ウォン、20 部屋以上ある家に住む人は二倍の 3 ウォンとなっていた。(皇城新聞、1908)。

中学校の入学者募集の基準は、後の基準に比べてあまり厳しくなかった。重要なのは、民間人のレベルにおいて、中学生としての基本的な資格、例えば年齢や漢字の読みの熟達度といった前提条件が検討されたことだった。

私立組織の指導者は、韓国が日本の正式な植民地になる一年前の 1909 年に学務課を組織し、一歩前進した。ソウル郊外にある普昌学校は江華地域を 56 の学区に分割する計画で中心的役割を果たした。またこの学校では、 15 歳から 20 歳までの生徒の中で、漢字の読みの能力が中学校レベルにまで達する者が増えた。また、中国語が上級の者は「教員教育の集中講座」(大韓毎日新報、1908 年 3 月 18 日) に登録するように勧められた。予算は三つの財源単位に分類された。義務教育事業への予算の配分、地域の指導者からの寄付、そして生徒からの学費である (大韓毎日新報、1909 年 2 月 25 日)。これは国家を守る方法として義務教育を普及させる民間人の運動の模範的な方法であった。このように、韓国民間人による義務教育制度の設立運動は、近代的な知が必要であるという信念を示すだけでなく、公教育が女子にも行われるべきだという民衆の意識を高めることに役立った。しかし、女子の中学校のカリキュラムは依然として女性の自然な感情の繊細さと謙虚さを強調する家長的な価値の中にあった。

5. 植民地下韓国におけるジェンダーと政治意識：1910 年の女子学校

植民地政権下の韓国において、国籍・階級・性別による教育機会の不平等は続いた。日本の土地改革計画は、韓国の人口の約 90 % を構成する農民の中で、旅農民と小作人の大幅な増加を生み出した（朝鮮総督府、1916）。日本の教育方針は私立の学校に厳重な支配力を持ち、私立学校の規則は強化され、特に、地元の村の学校では、日本語の教科書の使用が強制された。

娘を学校に送る余裕があるのは、都市に住む者や娘を教育する経済的能力がある者であり、そこに不均衡が生じていた。近代化の波と意識の成長はまだ 20 世紀初頭の女性の生活を変えるまでには至っていなかった。家長制の古い慣習的な文化体系と家長の権利が根強く、これらは、伝統的な生活を疑問視する革新に対する抵抗の主な原因となった。つまり、民衆はまだ新しい型の意識に改革されていなかったのである。ジェンダー間の平等を目指す最初の歩みが始まった所においても、娘に教育の機会を与えることが習慣として根づくには時間を要した。早婚、再婚の禁止、遺産相続に関する女性の低い優先権、そして家族儀式の遵守を規定する民法は 1920 年代まで変わらないままであった。

日本の植民地政府が規定した教育条例には、女子のための教育は家長制の反映であるということが含まれていた。

> 韓国の女子教育の独自の特徴
>
> 日本の植民地教育は二つの要素に関して、女子の小学校の卒業生への期待を重視していた。女性の重要な役割としての、子供の教育と母親としての役割である。（大韓毎日新報）

また、女性の役割を「良妻賢母」として定義することは同様に日本の文化にも当てはまるということを忘れてはならない。教科書では母親のイメージが繰り返し表現されていた（李、1990）。教科書の中の韓国人の母親のイメージは、弱く病気がちであり、強い母のイメージは不在であった。

貧困を除いてみても、民衆は、女子を家族にとっての「役に立たない重荷」と認識し、女子のための教育は贅沢と考えていた。エリートの学校を弾圧する植民地の方針の一部として、高等学校設立に関する厳重な規定と規則が適用された。私立の高等学校の創設の許可を得るために、学校は自給の経済能力を証明しなければならなかった。これらの障害にも関わらず、量的にも質的にも女子のための学校は拡大していった。

女子のための最初の学校であるミッショナリー・スクールの梨花学堂は修業年数を増やした。1912 年には、日本の総督府の認可によって、普通科のコースは 4 年間に拡張され、上級のコースは 3 年間に、そして大学部は 4 年間に拡大された。1914 年に、最初の大学部の卒業生は 3 人であり、翌年には 2 年間の小学校教員の養成学校が設立された。1918 年までに、普通科のコースは梨花学堂まで発展し、そして高等部は梨花高等学堂になった。

梨花学堂の特徴で重要なのは、生徒数が大幅に増加したことである。16 歳以前の早婚が一般的であった文化背景の中で、女性の家族への相続はわずかであり、学齢期の女子の識字率はわずか 10 % に達するのみであった。依然として支配的であった識字の基準は、漢字の読みであった。私立学校の試験では主に漢字の読み書きのコースが増えていった。

女子のための学校は、女性の中でエリート階級を作り出した。教育は「教育を受けないジェンダー・グループ」と「教育を受けたジェンダー・グループ」の小集団を分けるメカニズムであったのである。植民地政府は公立小学校に多くの学齢期の生徒を参加させる運動をしたが、1933 年に、小学校から高等学校までの女子生徒の総数は、女性の人口全体の 1. 2 % のみであった。女性の文盲率は 92 % であった（韓国銀行、1944)。植民地時代に韓国人生徒の学校の通学率は学齢期グループの 3. 7 % であるのに対し、日本人居住者の小学校の通学率は 91. 5 % であった。日本人生徒と韓国人生徒の学校の出席率の差は明白であり、中学校レベルではより大幅な差であった。

社会的なしきたりでは教育を受けていない女性は教育を受けた女性よりも望ましかった。教育を受けた女性に象徴的とされる昇任や指導者として

エリートに加わるようなことは稀であった。教育を受けていない女性は成功していないとは考えられず、恐らく今日的な視点からすると、疑問視されることなく受け入れられ、社会的な地位を獲得していたと考えられる。植民地時代の義務教育方針は、女子には無関係な問題であり、従って、多くの学齢期の女子は教育を受けない結果となった。

1919 年の三・一独立運動は日本の支配に対する直接的な挑戦であった。人口の約 5 % である約 100 万人のあらゆる地域のあらゆる職業をもつ韓国人が、植民地政府に対する抵抗運動に公然と参加した。この時、女性のエリートが重要な象徴となり、政治的な意味合いが多様な象徴的表現に綿密にまとめ上げられた。梨花学堂の生徒であった柳寛順は、政治的に重要な人物であった。「韓国の国家独立」のために植民地権力に対するデモに参加したエリート女子学生は、植民地闘争を体現し、女子学生の「新しい」イメージを表現した。「新しい」女性の外部的な現れは、植民地権力に対する政治闘争の形に移し替えられ、女性像が抵抗の中核となった。柳寛順の拷問と死にまつわる逸話はジェンダーの象徴的機構の正当性を再確認させた。新しいエリート、特にデモ行進に参加した女性は、民衆の賛辞と愛国主義的な英雄的行為を証明した。女子学生に関連する植民地抵抗運動の新しい表現は、ジェンダーの肯定的な性質の強い印象を与えた。

1919 年の三・一独立運動は、現代の韓国で日本からの独立を記念する国家的祝日の一つとされているが、ここから、特に党の形として徐々に組織化された政治へと発展していった。新しい象徴と儀式は政治意識を打ち出すのに最も受け入れやすい手段となった。さらに、朝鮮総督府は、初等教育を 4 年から 6 年に延ばす方針を含んだ教育勅令の改訂版を公布した。この勅令には女子の高等学校の設立と教員養成学校に関する方針の改訂も含まれていたが、それは教員養成の学校を高等学校の卒業生のための 1 年間の延長コースというよりも、独立した教育機関として設立することを目指していた。

女性組織は女性の政治参加、特に女子学生の参加を推進する文化を考案することによって抵抗的な政治慣例の性質を再組織した。父系権威の下にあっても、これらの新しい国家主義者の積極的な行動は弱まらなかった。

妻達の組織は、1919年の大衆デモに積極的に参加した。

新しい文化運動は、三つのグループに分類することができる。特に「新女性組織」などの新しい意識を持つグループ、社会主義連合、そしてキリスト教に基づいた女性グループである。クリスチャンの女性組織は特に地方と農村における知識の普及を中心とした。学術的な活動は、衛生に関する非科学的で迷信のような「非合理的」知識をなくすことに向けられた。青年女性クリスチャン組織 (YWCA) の活動は、聖書を読むことを通して識字を推進した。売春に対しても強く反対した。社会主義連合とは異なり、キリスト教組織は政治活動に傾倒していたのではなく、知識に基づいた情報を普及させる活動に従事していた。キリスト教系高等学校の教育目標は、個人の意識の発達と女子に将来の韓国の指導者になるための教育をすることに焦点を当てた。これはしばしば社会主義の女性組織から批判された。

> 彼ら（ミッショナリー）は、我々の現実社会に子供が関わらないように閉じ込めている。我々の子供達は日夜贅沢な生活を見るのみである。それは実に非調和的であり、我々の社会に合わない…。（東亜日報 1920年6月24日）

キリスト教系の女性運動は、地方の教育を中心とした。人々を「無知、貧困、病気」から救済することが彼らの使命であった。1920年代の朝鮮女性教育組織のような小さい組織が形成され、その目的は、家庭の主婦達が識字を得られる機会を提供することだった。これらの年配の生徒には夜間学校が開かれ、遠方の村を訪れるために巡回の講義グループが形成された。植民地韓国の女性の非識字率が80％であったため、切迫した必要性があったのである。1920年6月23日の東亜日報は連続講演の成功について次のように論評している。

> 正午前の晩、鍾路青年会館は800人の人で込み合っていた。入場権を手に入れられない人が多くいた。ソクチョンからの李ジョンシルという主婦が、お金が無かったため入場料と交換にジャケットを脱ぎ、これが

聴衆を印象付けた。(東亜日報、1920 年 6 月 23 日)

キリスト教の影響は韓国の高等教育の発展に影響した。また、カトリックの組織が高等教育事業と『新女性』といった出版物に貢献した。

6. 高等女子学校と新女性

1921 年に植民地政府は女性に関する民法を修正した。民法の原則は父系制と家長制の観念を包含していて、権利と義務は男性の家長に課せられいた。慣習法によれば、結婚は二個人の結合ではなく、二家族の合体であった。家族の主要な存在である両親の同意を求めずに、二個人の意志のみに基づいて夫婦として登録することは許されていなかったのである。

1920 年代の全世界の参政権運動では、選挙法、地域教育委員会選挙、都市選挙、議会への投票、投票権、立法府に仕える権利、そして政治権利の平等の規定を伴う改革プログラムがあった。1920 年代の植民地韓国では、国家主義と「フェミニスト」とを関連させる政治意識が高等学校の生徒にも浸透していた。それにもかかわらず、「フェミニスト」の視点は解放に関する概念を論ずるレベルではなかった。

主に東京に留学した韓国人女性によって社会主義派グループが形成された。社会主義派グループは、ジェンダー意識を高め、植民地政府に対する抵抗を推進する運動に力を注いだ。他の女性組織とは異なり、グループの中核メンバーは指導的な共産主義者の妻達であった。この組織は分裂を経験したが、後の 1924 年に強力な社会主義法を規定し、一つの組織に統合された。

1. 我々の組織は社会進化法に従い、新しい社会を設立し、女性解放を指導するために女性を育成し、訓練する。
2. 朝鮮女性解放に参加する過程において、女性の統一が我々の目標である。

（東亜日報、1924 年 5 月 22 日）

従って社会主義連合は階級意識に基盤を置き、その活動の焦点は抵抗のための資金獲得にあった。友好団は最大の組織化された女性組織になった。この組織の目的は民衆の意識を女性に向け、女性の権利を促進することにあった。友好団は女性に対する法的・社会的差別、日常の女性の迷信的信念、早婚、売春、子供と女性に課せられた危険な労働を廃止しようとした。友好団は特に小さい地方に組織を作ろうとし、組織網拡大の手段として、模範となる学校が開設された。地方地域では夜間学校が開かれ、算数、韓国語、作文、1927 年には日本語を教えた（朴、1984）。組織網の増大によって、社会主義連合は後には 1929 年の光州学生事件にも参加した。連合には女性メンバーも含まれ、学生運動の基盤となった。この政治意識の成長に対抗するために、朝鮮総督府は、特に公立小学校と職業学校の教師を対象とした日本への留学を企画した。

政治意識の発展と民法の改正は、女子のための学校、高等学校、幼稚園の発展に貢献した。中等学校ができ、教育機関の選択肢は以前より広がった。特に、公立小学校の生徒の募集はより厳しくなり、高等教育のレベルでは韓国の資本のみを基金とした大学の設立計画の草案につながる強い国家主義的な反応があった。1920 年代後半から、私立工科大学の拡大が目に見えて顕著になり、その中には、セブランス医学学校と二つのコース（高等コースと四年制大学コース）を持つ梨花女子大学があった。また、1921 年には、梨花幼稚園教員教育部附属の幼稚園が新たに教育的発展を遂げ、1925 年には、最終的に梨花学堂高等部が梨花女子専門学校へと発展した。これが最初の韓国における女子大学となった。

公教育を受け、上級の学校に進んだ女子学生は、「新しい」女性と捉えられ、並外れた資質を持った女性であると考えられた。女子のための教育における構造的・組織的発展は、女性雑誌の読者が増加したことからも見ることができた。この雑誌は一般の大衆には高度すぎるものだった。「新しい女性運動」には、海外で教育を受けた経験のある女性も含まれ、例えば雑誌の編集者、医者、或いは大学人になるというように、急進的に伝統

的な女性の習慣から逸脱していった。しかし、一般的には未だ女性の教育は家庭生活の文脈の中にとどまり、「個人の成功」の観念よりも、家族の創造の方が優先された。出身階級をなくすための教育理念は、女性には当てはまらなかったのだ。

女性に対する一般的な概念とは対照的に、新聞では著しい活動が報道された。医学、新聞出版、教育、看護、そして文学作家の分野で初の専門的職業が女性に開かれた。新しい女性像は政治化すらされなかったものの、ショートカットの髪型、現代的なスカートと靴の着用、衛生に対する高い意識、自転車に乗ることなどが含まれていた（李、1992）。女性として仕事を持つことは、植民地下の韓国においては挑戦的であると考えられていたことは忘れてはならない。女性の医者、新聞記者、芸術家、ピアニスト、歌手、振り付け師、作家、詩人、俳優、また飛行機のパイロットなどの職業は伝統的な女性らしさの概念を乗り越えると考えられた。民衆はこれらの教養ある女性達の一覧を入手することができた。1920 年代の優秀な新女性には、東京芸術学校の卒業生であるナ・ヘソク、雑誌編集者の一人であり、東京で学び、後に抵抗運動に参加したキム・ワンジュなどがいた。また、文学雑誌の出版に従事し、家父長制のイデオロギーに挑戦した新女性もいた。しかし、それぞれが社会からの疎外と自分の理想の限界に悩んでいたことも事実である。

この時期、恋愛結婚や異性とのロマンチックな愛情の概念は、奇抜すぎて「倫理的に正しい」とは受け入れられなかった。女性解放の概念は、植民地であった韓国が国家独立を得るための民衆闘争の方により関連していた。個人に関する自由主義的な考えは適さないと考えられていた。とりわけ、「新女性」は個人的な恥辱を受けた。彼女たちのジレンマは結婚と仕事、結婚と母性の問題だけではなく、それよりも、「新女性」は社会から隔離された新しいグループと考えられていたことにあった。この世代にとって、結婚せずに自活できるような社会に認められた仕事は稀であり、多くの女性が現実的な選択肢を得ることができなかった。妻と母親としての個人生活は、「新女性」の概念においてはほとんど繰り返されなかった。民衆は「新しい」女性知識人に衝撃を受け、特に「離婚」した人や「独身」

でい続けた人は「不道徳な女性」と非難された。

それにもかかわらず、「新女性運動」は女性のための教育とういう目標を適応させた。その目標は特にキリスト教系学校の組織に関連していた。クリスチャンのミッショナリー活動は特に韓国北部で顕著であり、教会と博愛主義の診療所を通して行われた。これらの活動は、家族における娘の地位に影響を与えた。特に、一旦家族がキリスト教徒になると、伝統的に家族儀式として一律に行われた祖上崇拝が行われなくなり、迷信に相当すると考えられた。

キリスト教の影響はいくつかのケースに見られる。高黄郷は小学生時代に、クリスチャンである父親の教育の重要性を強調する性の平等、特に教育は「指導者」になるため、という考えに励まされた。1909 に生まれた高は大学の学位取得のために日本に渡り、1924 年に同志社女子学校に入学した。1937 年には、父親の励ましのもと、博士号を取得するためにアメリカに渡り、ミシガン大学に入学した（林、1988）。韓国に戻った高はソウル女子大学を創立した。彼女はキリスト教の環境で育ち、アメリカのミッショナリーに触れ、これらを通して英語の聖書、言語と性の平等に関する考えに接した。キリスト教の影響を受けた韓国人女性指導者の中には、梨花女子専門学校の初代学長である金活蘭 (Helen Kim) がいた。金は 1931 年に「韓国再生のための農村教育」の論文でコロンビア教育大学から博士号を取得した初の韓国人女性である。

植民地下の韓国での女性の仕事はとりわけ家庭内の仕事と畑仕事を意味していた。教師はしばしば未婚女性の仕事として非難され、その道を進む人はほとんどいなかった。一方、既婚女性は労働力には適さないと考えられていた。結婚の解消などの新しい形のライフスタイルをとる個人は、家庭が社会に美化され、神聖化されることに反対であった。仕事は女性には理解されるはずのない男の世界と考えられていた。仕事は「自己実現」としてではなく、必要性から生じ、有給であることを意味していた。意識構造の改革は、徐々に小学校以降の教育を受けた女性から発展した。改革的な意識は苦しみと不平等の流行の意味を理解することよりも、家庭以外での女性の居場所の可能性についてであった。

原則として、学齢期の女子には教育の機会が与えられていたが、経済状況を考慮すると、「新しい女性」になるための訓練の概念は、主として都市の上流階級のみに当てはまり、更に実際にはその一部のみであった。しかし、少なくとも理論的には、どの女性も与えられた機関での教育を修めることによって上級の学校に進むことができた。

1930 年代には、女性の近代専門職業化は浸透した社会現象になり始めていた。高等教育の権利と公共の厳格な知的訓練への参加は女性の野心を刺激し、植民地下の韓国の指導権への大志を啓発させた。中には 20 世紀初頭の東北アジア都市の首都であった東京の大学で高等教育を受けた者もいた。

20 世紀初頭の韓国人のための公式の高等教育は珍奇であった。大学はおろか小学校以上のレベルの学校に通う経済的意識はほとんどなかった。それにもかかわらず女性の専門職業化が顕著であった分野は、小学校教員と看護であった。1935 年に設立された女性のための初の教育大学に続き、三年後には淑明女子大学で家政学と訓練部が導入され、同年に、政府は京城女子医学大学を創立した。高等女子学校と女子大学は生徒のすべての可能性を啓発するには特別な環境が必要であるという考えの下に設立された。

1930 年代後半から、植民地の教育政策は、戦時に備えて学校を主要な動員単位として利用する目的のために、小学校の拡大に焦点を当てた。このプログラムにおける資源配分に関する規定は、農村地方ではそれぞれの学年に別々のクラスをすべて補充するには至らなかったことを意味している。その代わりに、植民地政府は日本流の染め物、刺繍、或いは村の指導者の訓練の普及に焦点を当てた「非公式の女子教育」を利用した。これらの農村地域においては、「女性のための社会教育」が教育事業の公式の目的であり、公立小学校は「良妻賢母教育と天皇の忠誠な臣民」の基盤として考えられていた。その目的には、韓国語を読み、日本語を話すための識字率の向上と、「国家政策」と「国家精神」の意識を向上させることが含まれていた。例えば、京幾にある桜井公立小学校では、織物、織物の鑑賞、育児、女性の衛生、子供の心理、そして家庭生活のテーマを網羅した親のための講義が開かれた。

講義以外は、公立小学校は地域活動の媒体であった。女性のための夜間学校はほとんど公立小学校で開講され、親達が適切な日本語・倫理・算数・韓国語・漢字を学べるようになった。通常、夜間学校に通う学生は二種類に分類された。夜の八時から十時までの公立小学校の卒業生と中退者である（朝鮮総督府、1923、p. 130）。植民地政府は日本語の普及のためにより多くの学生を集めようとした。教師の家庭訪問は、この時期の学校習慣の基礎的な革新の一つであった。母親の会が教師の家庭訪問を計画し、また父兄や生徒が死亡した時には敬意を表する儀式を計画した。

7. 結

1880 年代初頭には、女子校はほとんど存在しなかった。1910 年までには、多数の、様々な女子校があり、女子教育の一般の意識はもはや新しくはなかったが、様々な女子校の中で近代教育制度を設立する作業は依然として困難なことであった。教育課程は聖書研究、漢字や韓国語、あるいは裁縫のように女性らしいと考えられる科目に限られていた。女性のための理想的な教育は「良妻賢母」を育てることであり、家父長制の伝統的な目的に限られていた。

しかし、徐々に伝統的な早婚の習慣と内妻はなくなっていた。それは、主に女子校の増加、女性組織の女子の公教育の権利の支持、そして政府の教育勅令といった要因によるものであった。1910 年代初頭には、梨花学堂は上級の教育コースに発展した。4 年の小学部、3 年の高等部、そして 4 年の大学部である。学校が発展するにつれて、女子教育の必要性の大衆意識は一般的になり始めていた。

広い社会的文脈の中で、男子は社会階級の問題と戦うだけでよかったが、女子は階級と性別による偏見の両方に苦しめられた点に注目しなければならない。植民地時代の韓国は女子教育をあまり支持しなかった。一般的な疑問は、なぜ女子を学校に送るのかということであった。淑明女子教育が受入れられたにもかかわらず、その使命は「幸せで文明化された家族を作

るために、女子が良い母親と妻になる」ことだけであった（朴、1984、p. 25）。一般の意識にもかかわらず、高等学校の創立者は教育的事業が最後には社会の指導者層階級に、「博学の女性」をもたらすと信じていた。

女性の高等教育の質的な拡大とは対照的に、植民地下の韓国で産業化が進むにつれて女性は多くの分野の労働力として動員された。植民地産業は農村から労働者を募集した。労働力はとても安く、特に製造と織物の部門の若い女子の労働力は安かった。1911 年の時点で、製造業に従事していた女性労働者は 10. 8 % のみであった。1940 年までには、学齢期女子人口の 40 % が労働に従事していた（申、1991）。労働環境における女性の扱いは一貫して劣悪であり、セクシャル・ハラスメントと恥辱的行為は韓国の風土的なものであった。女性の流入は工場の安い労働力の供給を増加させた。女性の雇用増加には、労働者の搾取の増加がともなった。女性の賃金基準は一般的に男性よりも低くなければならないと思われていた。さらに、長時間の労働は当然と考えられ、被雇用者に課せられた強制的な貯金は企業運営につぎ込まれた。

教育前線の眺望は悪化していた。1930 年代の終わりにかけて、軍事訓練が基礎教育課程の一部となり、授業時間は軍事準備のために減らされた。そして結局は、日本が中国で軍事行動を拡張するにつれて、学齢期の女子は「自発的組織」に強制的に入れられたのであった。

参考文献

尹一柱　(1988)　韓国建築史　金文堂
韓基彦　(1983)　韓国教育史　博英社
韓国銀行　(1944)　統計資料　韓国銀行
金用淑　(1990)　朝鮮女流文学研究　ヘジン書館
申ヨンソク　(1991)　韓国家父長制の史的考察　女性家族社会　pp. 34-50
孫仁銖　(1971)　韓国近代教育史　延世大学校出版部
朝鮮総督府学務局　(1916)　朝鮮人教育　私立学校統計

朝鮮総督府学務局　(1923)　学校を中心とする社会教育事情
朝鮮総督府学務局　(1943)　朝鮮諸学校一覧
丁瞕淑　(1986)　進明婦人会　大韓帝国研究 5　pp. 77-100
朴容玉　(1984)　韓国近代女性史　正音社
白楽濬　(1974)　韓国開新教史
庸允浩　(1981)　開化期の教科用図書　教育出版社
李圭泰　(1992)　韓国女性意識構造　韓国日報社
李孝再　(1989)　女性と社会　正音社
李麻芝　(1990)　ロバートキング・ホルの修身の再考察　戦後教育 7
pp. 25-34
李萬珪　(1947)　朝鮮教育史　乙西文化社
梨花女子大学出版部　(1972)　韓国女性史
梨花八十年史編纂委員会（編）(1988)　梨花八十年史　梨花女子大学出版部
梨花百年史編纂委員会（編）(1988)　梨花百年史　梨花女子大学出版部
林英哲　(1988)　コ・ファンキョン博士　三形社

Ebrey, Patricia (1991) The Chinese Family and the Spread of Confucian Values. In Gilbert, Rozman (Ed.), The East Asian Region: Confucian Heritage and Its Modern Adoption (pp. 45-83). Princeton: Princeton University Press.

大韓毎日新報　1908 年 3 月 18 日
大韓毎日新報　1909 年 2 月 25 日
皇城新聞　1908 年
帝国新聞　1898 年 9 月 13 日
東亜日報　1920 年 6 月 23 日
東亜日報　1920 年 6 月 24 日
東亜日報　1924 年 5 月 22 日
独立新聞　1896 年 6 月 12 日
独立新聞　1896 年 6 月 30 日
独立新聞　1898 年 9 月 13 日